

ペアレント・トレーニング・プログラムに関する効果測定を試み

—ノーバディーズ・パーフェクト・プログラムの調査研究—

○ 関西福祉科学大学 氏名 遠藤 和佳子 (2809)

キーワード: ノーバディーズ・パーフェクト・プログラム、PDCA、効果測定

1. 研究目的

子ども虐待が深刻化する現在、子どもの最善の利益と照らし合わせながら、家庭が安全で安定した育ちの環境となれるようサポートするプログラムがますます求められるようになってきている。ペアレント・トレーニング・プログラムは、そのためのひとつである。

今わが国では、これらペアレント・トレーニング・プログラムを計画・実施するだけでなく、効果を測定・分析し、そのことをふまえた明確な改善計画を立案していくことが何よりも必要となってきた。すなわち、P (Plan: 計画・立案) -D (Do: 実施) -C (Check: 効果測定) -A (Action: 改善) サイクルに沿ったペアレント・トレーニング・プログラムを策定していくことが、子ども家庭福祉において喫緊の課題となりつつある。

そこで本発表では、ペアレント・トレーニング・プログラムの一つであるノーバディーズ・パーフェクト・プログラムに焦点を当て、その効果を測定・分析し、プログラムの改善点を明確にする。

2. 研究の視点および方法

ノーバディーズ・パーフェクト・プログラムは、1980年はじめに、カナダ保健省（当時はカナダ保健福祉省）と大西洋4州（ニューブラウンズウィック、ニューファンドランド、ノバスコシア、プリンスエドワードアイランド）の保健部局によって開発されたペアレント・トレーニング・プログラムである。日本では、カナダ保健省の公認を得て、ノーバディーズ・パーフェクトにおける質の確保とプログラムの普及を目的に、2004年に資格認定機構「ノーバディーズ・パーフェクト・ジャパン (NPJ)」が設立されている。この「ノーバディーズ・パーフェクト・ジャパン (NPJ)」には、NPO 法人こころの子育てインターネット関西 (KKI)、子ども家庭リソースセンター (CFRC)、NPO 法人コミュニティ・カウンセリング・センター (CCC) の3団体が加盟し、プログラムの実践とファシリテーターの養成を行っている。

発表者は、2007（平成19）年から現在まで、ファシリテーターとしてノーバディーズ・パーフェクト・プログラムを実施してきた。本発表で用いるデータは、2011（平成23）年5月～2013（平成25）年10月にかけてプログラムに参加した母親たちを対象にプログラム実施の前（プレ）と後（ポスト）において行なわれた質問紙調査によるデータである。

3. 倫理的配慮

ノーバディーズ・パーフェクト・プログラムへの参加者である調査対象者に調査への協力を依頼する際には、日本社会福祉学会研究倫理指針に沿って、事前に調査の目的、内容、調査成果を公表する際の範囲、匿名性の確保といった点について十分に説明し、調査に対する合意が得られるようインフォームド・コンセントを行った。また、プログラム参加者だけではなく、発表にかかわるすべての人びとのプライバシーを遵守できるよう配慮した。

4. 研究結果

まず、ノーバディーズ・パーフェクト・プログラムの効果に関連する質問項目（Q1からQ50）について因子分析を実行し、3因子解を適当と判断した。その結果として著しく共通性の低かった項目（Q2、Q9、Q10、Q25、Q34、Q39、Q47）を除外して、再度3因子解を仮定した反復主因子法を実行した。全体に対する3因子の累積寄与率は、39.446%であった。バリマクス回転後の各項目の因子負荷量を解釈し、各因子を「子育て不安因子」「子育て孤立感因子」「社会からの隔絶因子」と命名した。ノーバディーズ・パーフェクト・プログラムがこれらの因子に対し効果を発揮しているか否かを分析するために、以上で解釈された各因子の標準因子得点を算出し、プログラム実施前と実施後の因子得点平均値について比較し、分散分析を行った。その結果、ノーバディーズ・パーフェクト・プログラムは、「子育て不安因子」（具体的には、「子どもがわずらわしくてイライラしてしまう」「子どものことで、どうしたらよいかわからなくなる」「自分は母親として不適合なのではないだろうか」といった項目）に対しては不安感を軽減する効果があるものの、「子育て孤立感因子」（具体的には、「子育て中の仲間と話すことで気持ちが楽になる」「子育ての話ができる仲間とこれからも付き合っていきたい」といった項目）や「社会からの隔絶因子」（具体的には、「育児に携わっている間に世の中からとり残されていくように思う」「自分の関心が子どもにばかり向いて視野が狭くなる」といった項目）という、それ以外の因子については、実施前と実施後の因子得点平均値の差に有意な結果をもたらさないことが分かった。

5. 考察

以上から、ノーバディーズ・パーフェクト・プログラムは、親たちが子育てに対して抱く不安感には効果をあげている一方で、親同士のつながりや、家庭をとりまく社会とのつながりについては、それほど大きな効果をあげていないことが明らかとなった。だが親や子ども、家族といったクライアントたちが自分自身でみずからをとりまく環境や問題に目をむけ、その意味をリフレーミングしていくためには、親が友人関係をはじめとする多くの人的ネットワークを形成するとともに、自らが社会と結びついているという感覚を持つことが大切になるはずである。それゆえ、このプログラムを、今以上に、地域・社会をまきこむ（ラップアラウンドする）プログラムへと改善することが必要になるだろう。